可愛いと思ってるし…すごく大変な経験してきたってのに折れないし、頑張り屋さんだし…お前といると楽しいし…」
「じゃあ好き？」
「す…好き、だよ」
「なら、ノープロブレム。両想いですね」
「問題はあるだろっ！」
「どこにですか？」
「俺もお前も男だぞ？」
「そうですね」
「そうですね、ってお前…」
「でも、僕はあなたがいいんです」
お願い、僕を拒まないで。
バーナビーは虎徹を抱きしめる腕に更に力を込め、もう、二度と離さない、とでも言うように虎徹の首筋に顔を埋めた。そしてもう一度、あなたがいいんだ、と苦しそうに呟いた。
あのプライドの高いバーナビーが…いつの間にこんなに可愛くなったんだろう？ずるいなぁ。
虎徹はため息を一つ吐き、体の緊張を解いてバーナビーに体重を預けた。
「バニー、お前さぁ…引退してから今まで何してたんだよ？彼女の一人もできなかったのかよ？情けない」
「想いを寄せてくださる女性は何人かいましたけど、彼女たちを好きになる可能性はゼロでした。僕はあなたのことしか考えてませんでしたので」
「バニーはもっと賢いかと思ってたよ。ほんと、バカだよ…モテるくせに、こんな使い古したオジサン選ぶなんて」
虎徹の手がバーナビーの背中を優しく撫でる。
「自分でもそう思います」
バーナビーは苦笑して、もう一度虎徹にキスをした。
虎徹がバーナビーのベッドに横たわると、羽枕の空気が抜けてフワリと甘い香りが漂った。
「あ、なんかいい匂いがする」
「アロマオイルの香りですよ。すごく熟睡できるんです」
「アロマ？花の名前？」
「いいえ、アロマっていうのは香りのことで、アロマオイルっていうのは植物の香りが凝縮されたものです。これはイランイランっていう花の香りですよ」
「面白い名前だなー。どんな花？見たことねーんだけど」
「ねぇ、もう黙って…」

SAMPLE